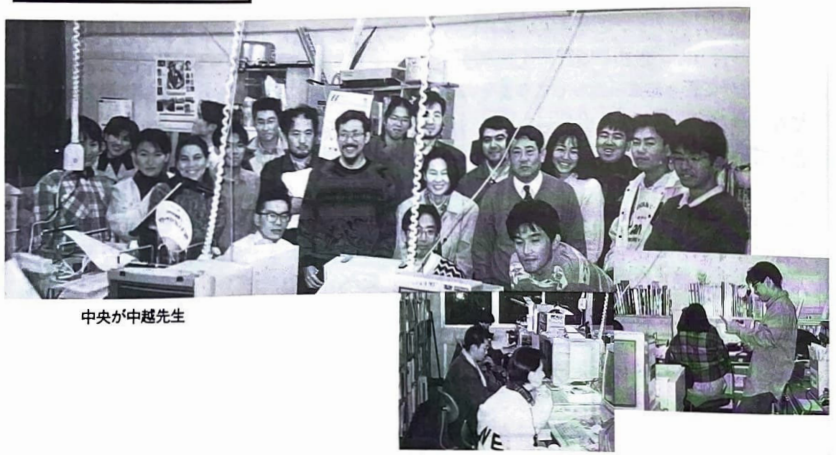
研究室紹介（理系）

中越信和研究室　C401（自然環境研究コース）



中央が中越先生

【研究内容】

◆あなたも私も植物が作り出した世界で生きています。そのかけがえのない植物の生態と利用を調べています。根平教授と共同で研究していますのでかなり幅広く植物界相手という感じです。

【研究室の雰囲気】

◆ハチの巣：調査に連れ立って出かけるグループ，いいアイデアを考えついたとはしゃぐ院生，論文が受理された笑顔の院生等々。卒論生からＤ３まで学生の縮図がここにあります。

●研究室のメンバーでドライブなどに出かけると，車窓から「あの木は…」と植物同定大会が始まる。休みの日にも研究を忘れない，なんて熱心!?

●部屋の広さの割に荷物と人が多く，３つある部屋はどこも満杯状態です（そろそろ密度効果でみんなヤセ始めるかも!?）。でも人が多いだけ研究分野が広く，ブナ林から湿原まで様々な自然環境を楽しめます。

●衣食住すべてをここで済ませようとする人が続出するほど，居心地の良い所です。人が多くて密度効果が生じ，時間的住み分けが起きているのも事実です。いつ来ても人がいる。

【学生に一言】

◆手作りがいい。のめり込めるから。物も心も既成品はよくない。ユニークにいきましょう。

【先生はこんな人です（研究室の学生より）】

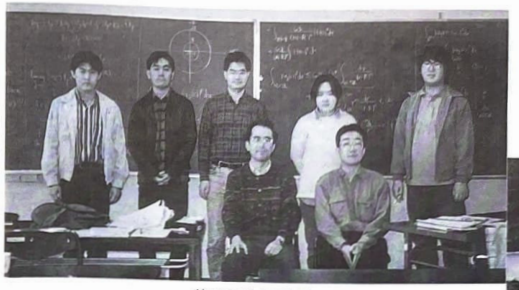
●仕事熱心な先生です。朝早くから夜遅くまで机に向かっておられる姿には，いつも感服します。それでもお子さんが誕生されてからは，少し帰りが早くなられました。お子さんの前では，目尻が下がりっぱなしになります。

●とんでもなく大量の仕事を並行してバシバシこなす，あの情報処理能力と記憶力はすごいと思います。そう，まるでMacintoshのようにマルチタスク。

●一見の価値あり。来てみて触ってみて下さい。ご自由に…

●動の中ボスと，静の根ボス，研究はとにかく自由にやらせてくれます。学生の放牧状態…

水田義弘研究室　C805（数理情報科学コース）



前列左が水田先生

【研究内容】

◆古代ギリシャのアルキメデス以来，図形の面積を求める方法としての積分学は，17世紀，ニュートンによって，運動を解析するための微分法と結びつけられ，微分積分法として大いに発展してきた。17世紀，18世紀に扱われた関数はいわゆる解析関数で，単純に見えるが驚くほど味わい深い性質が数多く発見され，現在では，関数論としてまとめられている。微分，積分の対象となる関数は，19世紀になると，さまざまなものが発見された。

◆私の研究内容は，ソボレフの関数の微分可能性，またその前段階としての連続性を調べる事である。ディリクレ問題と関係して，境界近くでの振る舞いが興味深い。この研究においては，ソボレフの関数に対するポテンシャル表示が有効である。

【研究室の雰囲気】

◆私の研究室には，生物圏科学研究科を修了し研究生として研究に励んでいる者を筆頭として，理学研究科数学専攻の大学院生を含めると，５名の大学院生がいる。セミナーにおいて，発表者が理解していないと思われることを質問していくと，発表者の声がだんだんと小さくなって弱々しい。従って，セミナー以外の時間は同僚としてつき合えるよう努めている。

●なごやかな雰囲気。

●飲みが比較的多い。

●理学研究科の学生がウロウロしている。

●セミナー中に，紅茶を出してくれ，それを飲みながらセミナーをやる等，アットホームな雰囲気。

【学生に一言】

◆数学の研究をするにあたって，数学が必要であることは当然であるが，応用数学や物理学など他の研究分野に対する柔軟な理解が望まれる。

◆何事をするにも，日本人が伝統として保ってきた勤勉性が最も大切であると思うが，自分の子供を見るにつけ，子供の時から満ち足りた生活を送った者の将来が不安である。

【先生はこんな人です（研究室の学生より）】

●酒と釣りと数学をこよなく愛する。

●普段は優しい先生ですが，数学に対しては厳しい。

●日々多忙にもかかわらず，いつのまにか数多く研究をされている先生には，いつも驚かされます。

●お酒が大好きで，話題が豊富で，いろんなことを知っていらっしゃるので，一緒に飲みに行くと楽しい先生です。

渡邊一雄研究室　C324（物質生命科学コース）

「生命現象の普遍性を語る分子生物学の黄金時代はもう過ぎた。これからは生物，特に種の多様性を，分子生物学を徹底的にふまえて理解する時代です。」－渡邊先生談

【研究内容】

◆ヒトを含む動物の個体発生の仕組み，特に形とパターンの形成メカニズムを分子から細胞のレベルで研究しています。具体的には，これまで脊椎動物の骨格の形成を研究してきましたが，これからは昆虫（蝶・蛾）の翅のパターン形成（蝶の翅の模様がどうやってできるか）の分子機構を研究しようと思っています。原理はほとんど同じなのです。

【研究室の雰囲気】

◆実験系ですが，どちらかというと自分で勉強してどんどんやってもらいたいと思っています。（今のところ厳しい徒弟体制はとっていません。のびのびと勉強して欲しいと思います）
以前は賑やかでしたが，最近2・3年は少し人数が少なくなっています。

●渡邊先生はあまり干渉しない先生なので，すごく自由な生活ができます。が，その反面，自分で勉強や，実験をしなければいけないのでたいへんです。

●うちの研究室にきたいと考えている人は，うちの研究室でやっていることの意味をよく理解することが大切だと思います。ひとことでいえば，とても『生物学的』なのです。

【学生に一言】

◆物事の多様性に対する理解が著しく不足していると感じる学生が急に増えてきたように思います。一つの問いに対する答にしても，含蓄や深みを理解出来なくなっているのではないかと深く危惧しています。

◆うまくはまると明るくて元気な事は評価出来ますが，世の中そんなにうまくいつもはめてくれないよ。

【先生はこんな人です（研究室の学生より）】

●先生は話題が豊富で面白く，たとえ話がすごいので，最初は驚くかもしれませんが，慣れれば，普通になってきます。

●昔はこわかったらしいですが，最近は，怒鳴る元気がないようです。周りの学生さんががんばれば，先生も元気がでると思います。

●蝶の話をしだしたら長いです。

浦　光博研究室　A220（生体行動科学コース）

中央が浦先生

【研究内容】

◆他者との関係の質が，人間を幸せにしたり，不幸にしたりるする過程についての計量的分析。ただし，人間の幸せとは何かを考えるとき，人がその中で生きている社会システムがどのようなものなのかについての検討なくしては，十分な答は得られない。したがって，現代社会の特徴をどのようにして操作可能なものとするのかについての，理論的・概念的検討も重要なテーマである。

【研究室の雰囲気】

◆ぼくが学生に接するとき，いつも忘れないでいようとしている言葉は，「好んで秩序に従おうとするものを創造的な人間に変えることは，その逆より難しい」というもの。まず創造的な人間であってほしい。そうでありさえすれば，そんな人たちに秩序を与えるだけの理念は用意できているつもりなのだが。なかなか研究室全体の雰囲気がこの思いを反映したものになりきらないのが，ちょっと残念。

●非常に明るく活発，そして何でも言える雰囲気です。

●研究会が長い（朝9：00～夕方6：00。その後飲み）

●ほぼ毎週金曜日は，より活発な討論が夜7時くらいから行われている。

●毎年高い競争率の中を勝ちぬいて浦研究室に入ってきただけあって，学生は個性豊かで精鋭ぞろい。ボケさせても，つっこみさせても天下一品。

【学生に一言】

◆口先だけの個人主義は，そろそろやめにしないか。個性を磨き，他者に誇れる能力を身につけてほしい。

【先生はこんな人です（研究室の学生より）】

●元気（でも最近よく風邪をひく）

●子ぼんのう（目に入れても痛くないほど…）

●お酒好き。お子さんからも「もう！飲みすぎよ」と言われるらしい。

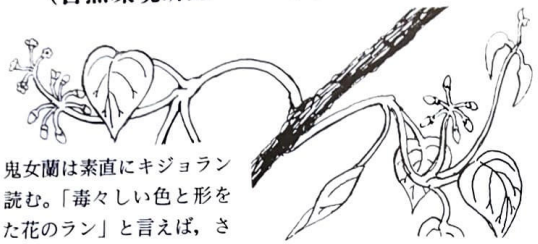
●めんどうみがいい（たくさんの院生や学生を抱えて，それぞれに的確な指導を与えて下さる。でも，あまりに忙しくなると，結構，てきとーかつ思いつきをしゃべったりする）

●温和。怒る時も相手のことを考えて，計算したしかり方をする。（まじで怒った時→他の人にも怒りが波及する。計算して怒った時→その人だけの被害。かつ，短期的）

●理論派。恋愛相談をしても「変率強化スケジュールか…」などとすっかり冷静な気分にさせてくれる。

「鬼女蘭」

本　田　計　一（自然環境研究コース教授）



聞いただけではチンプンカンプン，文字を読んでもサッパリ不明。最近このような，知識や想像の限界を超えた難解語が巷に氾濫している。特におじさん或いはオジンと称される私の属する人種は，流れの狭間に漂う落ち葉の如く，見知らぬ言葉に翻弄されることが多いようだ。母と娘がダベリながら，流行水着のTバックの話で盛り上がっている傍らで，湯茶のサービスも受けられず一人ふてくされて新聞を読んでいた父が，精一杯の参画意志と父権を示すべく「オイ，俺にもTeaバッグをくれ」と叫んだ，という話はもう古いが，これには笑い飛ばしてばかりもいられない悲劇的なものさえ感じられる。かく言う私も，長電話に興じる娘にイライラしながらも，時折発せられる“チョーMM”なる‘暗号’に「ン？ムムッ」などと鈍く反応してしまう同類項である。しかしこれらの多くは無視してしまえば済むことであって，人畜無害ではないにせよ社会的影響は小さい。が，これらの事例とは逆に，明確な表意文字で構成された言葉が，正しく物の体を表さぬまま流布される場合は事情が異なってこよう。

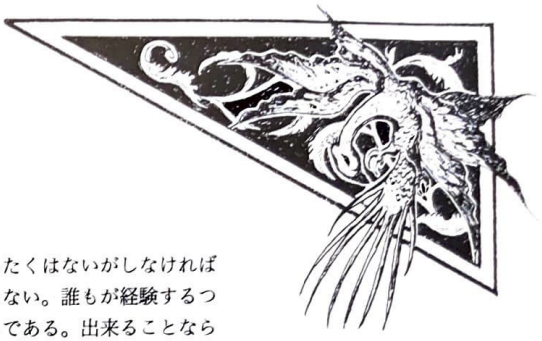
鬼女蘭は素直にキジョランと読む。「毒々しい色と形をした花のラン」と言えば，さもありなんと，興味をそそられる人も多いに違いない。が，実物の姿を，何人たりともこの名前から想像することはできないであろう。ランとは無縁の，大きな卵円形の艶やかな葉を誇らしげに広げるこの常緑の美しい植物は，盛夏に小さな白い花を装い，ひっそりと山の谷間で暮らしている。名の由来，命名者のセンスをここで云々するつもりは無いが，これほど名前と印象のかけ離れた植物は少ないのではあるまいか。

中身と外見，内面と外面，本音と建て前，裏と表，…等々，しばしば不一致な，或いは相対するものの例えとして使われる言葉は多い。何であれ，見てくれを立派に，魅力的にすることは必ずしも無意味ではない。人は往々にして，外見で品定めをするからだ。が通常，原資には限りが有り，その中での外面装飾には自ずと常識的な範囲，程度という制約が伴う。言うまでもないが，過度に無理を通せば，自ら破綻の道を歩むことも覚悟せねばなるまい。普通，人は理不尽な暴力的発言に対しては強いが，正論には概して弱い。見識の高い人ほど，正論に対しては無抵抗であるように思われる。その意味で，手にしたら離さず何処かれ無しに振り回される正論は，時として暴論以上に暴力的な刃になる場合が有る。

今，当学部では改革に向けて精力的に作業が進められている。中心となってご尽力されている方々の御苦労は，端で見ていても胃の痛む思いがする。外見を整えることも正論。中身を充実させることも正論。外見にも中身にも色々有る。議論はさまざまであろう。が，叡智をもってした改革の産物が「総合苦学部」となることは悲惨の極みであり，羊頭を懸げて狗肉を売るような事態も避けねばなるまい。何が学部や我々の将来に最も意味の有ることなのか，限りある総原資の中で，コスト・パフォーマンスの良い策は何であるのか，徒に正論に酔うことなく，これらを識別し，取捨選択する「勇気有る見識」に我々の将来はかかっているのではあるまいか。

勉強することについての考察

河　合　慎一郎（自然環境研究コース２年）



学生の本分はやはり勉強である。何のために厳しい受験戦争を乗り越えて大学に入ったかと聞くとたいていの人は「やりたい勉強をするため。」と答える。中には「大学生活という人生の中の夏休みを楽しむため。」という人もいる。しかし，そのような人たちも勉強する。単位をとるため，ひいては卒業するために。何だかんだ言っても全ての学生は勉強するのだ。

一口に「勉強する」と言っても，それには大きく分けて二つの状態があるように思える。一つは自分がその分野に興味を示し，勉強することが楽しくってしようがない状態。もう一つは，たいして興味の無い分野をいやいやと勉強している状態。前者の状態のとき，人は時間を忘れ，思考する事の楽しみを嚙みしめ，知識が増していく事への満足感を味わう。そして，ノートを閉じペンをおいた後もなんとも言えない充実感が心の中に満ちてゆく。学ぶことの楽しみを実感しているのだ。それに比べて後者の状態のときは勉強することが苦痛でしかない。この場合，勉強するのはレポートの〆切が迫っているから，テストがあるから，といった風に，勉強を目的としてではなく手段としてとらえていることが多い。

したくはないがしなければならない。誰もが経験するつらさである。出来ることならばこの現実から逃避したい。その思いがあるから机に向かったとたんにちらかった部屋を片付けたくなったり，読みかけの小説に手をのばしたりしてしまうのである。この「悪魔の誘い」に耳を貸すかどうかで，天と地ほどの差が出てしまう。筆者も八週間分のレポートをためこみ，その〆切が翌日へと迫った夜，「今夜こそは勉強しよう。」と断固たる決意をもって机に向かったが，「息ぬきに少しだけ。」とはじめたテレビゲームが止められないまま朝を向かえた事があった。朝日が目にしみる，という表現があるがそんな可愛いものではない。一日の始まりを告げる筈の太陽の光はその時の筆者にとっては地獄の却火同然であった。その光の中で己の意識の弱さを悔い，これからの事を思い絶望する。このときの心境をあえて言葉にすれば，「とほほ…」この一言である。かなり情けないものがある。

集中力の違い，と言ってしまえばそれまでかも知れない。しかし，やはり楽しい勉強とそうでない勉強は確実に存在する。楽しい勉強だけをやっていたいが，そういう訳にもいかない。楽しくなくともやらねばならない勉強もある。要は，如何に好きな勉強をより楽しみ，ということだと思う。案外，食わず嫌いということもあるかも知れない。

言うは易し，行うが難し。嫌いなものの中に楽しみを見付けていくのはそう簡単な事ではない。筆者も，卒業するまでの残り数年間，数学に苦しみ続けることであろう。しかし，やるしかないのだ。逃げる事は許されてはいないのだ。自分の信じた道を真っ直に歩いていく。英語に直すとGoing my way. 誰が英語にしろと言った。

時　間

有　村　大　士（1年）

私が総合科学部に入学してから，早いものでもう半年以上がたった。この間，いつも私の頭の中から決して離れなかったのは「自分に与えられた時間を有効に利用できているのか」という問いだ。この問いは，大学入試の存在で，常に将来の自分が見えない高校時代，浪人時代を通じて，自分を振り返り，自分に必要な事は何か考えされる良い問いだった。大学生になり，そして総合科学部で学ぶようになった今の自分を対象にして，この問いについて，そしてどう時間を過ごすべきなのかについて論じてみる。

まず自分という人間が一生のうちに与えられている時間について考えてみる。今の日本の男性の平均寿命を考えると80年といったところが答になる。80年といえば，もう少し歳をとれば見方は変わってくるかもしれないが，20年しか生きていない今の自分には，膨大な時の刻みを必要とするとてつもなく長い時間に感じられる。でもみんなが80年の生を与えられているのだろうか。違う。80年より長い時間生きる人もいれば，80年生きられない人もいる。では，ここで視点を変えてみたい。人間には，生命を脅かす様々な要因がある。戦争，病気，交通事故，火事，…。数えてキリがあるはずがない。つまり，私たちの生命は，それだけの危険と隣り合わせに存在している，はかないものなのだ。従って，人生80年といってはみたものの，本当に80年の生が与えられているかというと眉唾ものである。そう考えてみると，今自分が何気なく過ごしている今の時間とは何と貴重なものなんだろうと思えてくる。それならば，いつ死んでも全く後悔しないでいいような人生は難しいとしても，それに一歩でも近づくには，自分の時間が質の良い時間となるように生きていかなければならない。

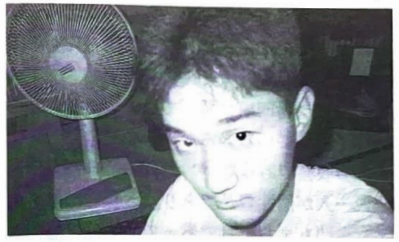
大学時代でも全くそれは変わらないはずだし，これからの人生において，質の良い時間を過ごすためにも，自分にとって意味のある時間を過ごすようにさらに努力していかなければならない時期だろう。では，大学生の自分にとって，上質な時間とはどういう時間なのだろう。私は，学ぶ時間だと思う。どういう人間が社会に貢献できて賢い人間なのか分からないが，自分が自分なりに，社会に貢献できる人間になるために学ばなければならない。そうするためには，あまり一人よがりにならない程度に自分なりに考えて，できるだけ吸収することが多い時間を過ごしていかなければならないと思う。

大学には，教官と授業のシラバスだけで自分の時間を出席にかけるだけの価値がある講義なのか分からないまま講義をとり，その講義に出席して，単位を取らないと卒業できないという制約がある。それにジレンマを感じて，大学をやめて公務員試験を受け，自分の読みたい本や，学びたいことを空いた時間で好きなように勉強しようと思っていた時期があった。しかし，大学時代とは，自分が必要と思うことを主体的に学ぶことを職業にできる最後の時間だろうと思い直した。だから，自分でその時に学ぶことが必要と思うことを優先しながら，大学生活が今，そして今以降の自分にとって上質なものとなるように自分の時間を過ごしていきたいものだと思う。

物干し竿の話

渡　邊　忠　信（社会科学コース3年）

私のアパートの大家さんは，お好み焼き屋を経営している。しかし，国家予算の一部を食いつぶす「飛翔」の誌面でその固有名詞を公にするのはためらわれるので，下見街道から蓮華寺橋を越えて西条方面へ少し行ったところにある小さな店，とだけ言っておこう。男の腹でも結構一杯になるほどのボリューム（それでも一気に平らげてしまうのだが）の広島風お好み焼きだけではなく，食後にはコーヒーのサービスも付いているのがうれしい。



店の宣伝はこのくらいにしておこう。それより大事なのは，我々アパートの居住者には大家さんからタダ券が支給されるということである。ちゃっかり2枚あるということは，誰か新しい客を連れてこいということなのだが，それでも一人暮らしの学生には限りなくありがたいシステムだと言えよう。そして，この券をくれる方法というのがまた素晴らしい。我々のアパートでは備え付けの電話(内線でつながるヤツ)の通話料金が家賃に加わるため，大家さんが月毎に変動する家賃の金額を家賃袋に記してうちのポストに入れるのだ。そして私は指定された金額を袋に納めるのだが，その時に袋の中からタダ券2枚が現れる，という寸法だ。つまり，家賃袋を介した大家さんと居住人の一つのやりとりなのだ。

私はそれまで住んでいた池の上学生宿舎を追い出され（居住期限が2年間なのだ），平成8年の3月から現在のアパートに住んでいる。私の隣の住人は4月に越してきた理学部の1年生なのだが，同じく新入りというわけだ。6畳間にキッチン・バス付き，トイレは共同で家賃2万3千円（エアコン付きの部屋は2万5千円）。風呂が追い焚きなのは実にありがたい。場所は御薗宇の某コンビニの近くで，なかなか便利である。洗濯は学生宿舎と同じでコインランドリーが備え付けられている。ただ，部屋にはベランダはなく窓だけで，部屋の中に物干しロープが一本張り渡されているだけであった。洗濯はどうしようかと思いながら，仕方ないので部屋の中に干し，窓を開けて通風を保つことで湿気がこもるのを防いでいた。

ある日，タダ券を持ってお好み焼きを食べに行くと，大家さんのおばさんから「今度，窓の外に物干し竿を付けるからね」と言われた。何でも隣の彼が「付けてくれ」と言ったのだそうである。おばさんは私に「気づいた事があったら言ってちょうだいね」と言った。そういう事が言えるのはやっぱり1年生だなあと思う一方で，そのままで済ませてしまうことのもったいなさに改めて気づかされた思いがした。いつからこんなに諦めがよくなってしまったのだろうか。彼がいなければ，私も含めてこのアパートの住人はみな物干しなしで暮らしていたのである。数日経って大学から帰ってみると，窓の外に物干しが付いていた。さっそく洗濯してみるとやはり乾き方や速さが違う。これもみな彼の「生活をよくしよう」という向上心と率直さのおかげである。

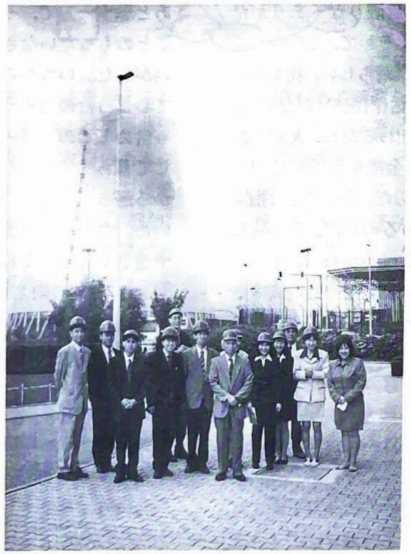
現在，私の部屋では物干し竿と物干しロープが共存している。ロープは雨の日に役立つだけではない。一旦外の物干し竿で乾かした洗濯物を吊るしておき，着替えがあと何日分あるかというバロメーターとして活用しているのだ。吊るされたシャツがなくなると重い腰を上げ，「やれやれ，洗濯でもするか」という自堕落かつ怠惰な生活は，どうやら今後も改まりそうにない。

賞をもらって

「大学生第３回懸賞論文 —21世紀のエネルギー・環境問題を考える—に入選して」

市　本　秀　雄　（生物圏科学研究科博士過程前期２年）

今年の９月１日正午，私はヨーロッパでの９日間に渡る研修を終えて無事関西空港に到着した。この研修は今年の春に募集された財団法人中国地域エネルギーフォーラム・株式会社中国電力主催の懸賞論文に入選した副賞として行われたものであり，私はその十人の内の一人に選ばれたものであった。この懸賞論文には私と同じ早瀬研究室の赤井さんと山西君がそれぞれ第１回と第２回に入選していたので，それに続くことがで来たのはうれしかった。テーマは「21世紀のエネルギー・環境問題を考える」であり，各自がそれぞれサブテーマを設定して論旨を展開させるものであった。１年前，廃棄物について勉強しはじめた私は，第２回懸賞論文に応募してみたのだが，残念ながら落選であった。あれから１年，自分の研究とも重なる部分もあり「今度こそ」という思いで再度挑戦（応募）してみた。その内容は，ごみ問題についてセルフ・ディベートを行い，最後に環境問題の本質的解決に向けての環境教育の重要性を強調するものであった。研究や就職活動に忙しい頃ではあったが，下準備にも時間をかけていた事もあり自分自身納得のいく出来栄えであった。応募から約２カ月後に入選の連絡があり，晴れてヨーロッパへの切符をいただいた。



私を含め参加メンバーのほとんどが海外がはじめてという人ばかりであり，不安と期待で胸がいっぱいであった。はじめの目的地フランクフルトに着いたのは現地時間の夜９時頃なのにあたりはまだ明るかった。日本との時差が７時間ありしばらく時差ボケに苦しんだ。翌日，緊張しながらヨーロッパでの１日目の朝を向かえ，ドイツで４日間，フランスで３日間の研修を行った。とはいっても，ミュンヘン市の省エネルギーカウンセリングセンターとフランスのノジャンシュセール原子力発電所への正式訪問以外の時間は普通の観光旅行のようなものでありいろいろな名所がまわれた。その中で私は特に伝統を重んじるドイツの町並みが今までの歴史を感じさせてくれたので一番印象に残っている。また，この研修を通じていろいろな人と出会えたことも大きな収穫であった。特に今回のメンバーは，一人一人が個性豊かであり，さらに年齢も大学も専門もまちまちであって，お互いも持ち味を出し合うことでよりいっそう楽しい旅行となった。

研修を終えて今思うことは，異国の地で様々な人や文化に接することでしか得られない貴重な体験ができ，今までとは違う視野で物事が考えられるようになってよかったということである。と同時に，このような素晴らしい研修を経験させていただいたメンバーや添乗員，引率者ならびに主催者の方々に厚くお礼を申し上げたい。この経験を今後に生かせるようにしていきたい。もし，この懸賞論文集を目にすることがあればぜひ一読していただきたい。そして，今度はあなたにも様々な可能性にチャレンジしてもらいたい。

お初にお目にかかります －新任教官紹介－

布川　弘（地域文化コース助教授）

初めまして。「ぬのかわ」と申します。よく「ふかわ」と間違われます。所属しているテニスクラブのおばちゃんたちには，「ふっくん」と呼ばれております。実の「ふっくん」とは外見が全く違っていることは本人が最もよく自覚しており，とりわけ顔が異様にでかいことは最大の欠点であります。赴任して早二月，一番の楽しみは，日本研究の先生方と酒を酌み交わすことです。それだけでもいい職場に来たなあと思うのです。赴任当初の不必要な緊張もほぐれ，わりと早くリラックスして仕事ができるようになりました。現在単身赴任中ですが，女房に財布の紐をしっかり握られておりますので，余計なことをしたりすることは全くありませんからご安心ください。地域に根付いた研究をモットーとしておりますので，女房・娘を早く呼び寄せ，地域に根を張るつもりです。戦後の広島には大きな関心があり，何年かかるかわかりませんが，その地域形成の過程を具に研究しものにしたいと思っております。

水羽信男（地域文化コース助教授）

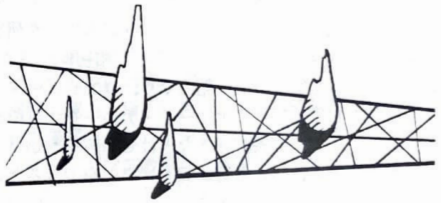
僕は1978年，広大文学部（東洋史）へ入りましたが，総科を最初に見近に感じたのは，学部３年の時でした。アジア研究の助手・院生が主催していた英書の読書会に入れてもらったのです。この読書会は中国現代史を考えていくという，僕の研究生活の原点となりました。その後も，たとえば院生と予備校講師の「二足の草鞋」を履いた時，進路を考える上で，強い影響を受けたのは，その予備校におられた総科出身の専任講師の方でした。彼らはお酒の飲み方から，恋愛のイロハ，そして貪欲なまでの知的好奇心の重要性を，実践で示してくれました。そして仕事に対する目的意識や方法論，そして広島という「田舎」で活動を継承するための熱情も…。彼らに対する感謝の思いを込めて，教養的教育は当然のこととして，他学部の学生に影響を与えうる“総科の学生”を育てていくことに，関わり合いたいと考えています。

西村雄郎（社会科学コース助教授）

昨年10月１日付けで鹿児島女子大学から転勤してきました。

「予想外のことがあれこれおきる」という都市社会の魅力に興味をひかれ，都市社会学を専攻。「何より現場にいって事実を確認すること」をモットーとして，都市社会を対象としたフィールドワークを主に行なってきました。現在は，日本の都市社会の形成過程を町内会を中心とする都市地域社会集団に焦点をあてて分析することで，日本の都市地域社会の歴史的特質を明らかにすることを主な研究課題としています。

これまで勤務していた大学が学生数800名，教員が40人といったこじんまりした大学だったため，総合科学部の巨大さは大きな驚きです。しかし，都市は多様な人々が，多様な形で，大量に集まることによって，人々を引付ける多様な光彩をはなっているといいます。総合科学部の巨大さの中にかくなる魅力があることを信じて，今後の研究・教育生活を行なっていきたいと思っています。



今野　均（数理情報科学コース助教授）

1961年２月１日生まれ35歳。妻と息子２人の４人家族。理学博士(筑波大学)

専門は数理物理学で，可解格子模型や可積分な場の量子論の研究を行なっています。特に，可積分構造を保証する対称性として，アフィンリー代数や量子アフィン代数などの無限次元の代数に注目して，その表現論に基づいてこれらの理論を文字通り完全に解いてしまおうということに取り組んでいます。最近，量子代数(量子群)は，可積分な場の理論ごとに新種のものが出現するといった様相を呈し始め，その分類や表現論の整備，物理学への応用とこれからますます面白くなっていく分野であると考えています。

また，この例に限らず数学と物理学とは最近特に交流が活発化し，それぞれの最先端の研究において多くの重要な発展をもたらしていると同時に，新たな研究分野を急速に開拓しつつあります。数理物理学におけるこのような状況をできるだけ多くの人に知ってもらい，興味を持って戴くことで本学部の特色ある教育研究に貢献していきたいと考えています。

隅田浩樹（数理情報科学コース助手）

平成８年３月に東京大学大学院数理科学研究科博士課程を修了後，日本学術振興会特別研究員を経て，10月から助手として採用されました。

これまで代数的整数論，特に岩澤理論について研究を進めてきました。この理論はゼータ関数の特殊値を理解することが大きな目標であり，現在様々な一般化，応用が試みられています。近年話題になったワイルス教授によるフェルマーの大定理の解決においても，この美しい理論は重要な影響を与えました。私の目標は，この理論の中で生まれた新しい概念を用いて，さらに新しい事実を発見することです。

趣味は，海釣り，スキー，鉱物採集などです。田舎育ちなので，家にいるよりも外で遊ぶ方が好きです。この自然豊かな西条キャンパスで，研究，教育に精一杯とりくんでいきたいと思っていますので，どうぞよろしくお願いします。

Amy, Iwasaki Mass（外国人教師・日米教育委員会派遣交換教授）

Professor Amy Iwasaki Mass is the current Fulbright Lecturer in the American Studies Department, Area Studies Division. She comes from Whittier College, a small liberalarts college in Southern California, where she is Director of the Social Work Program. Mass received her BA from the University of California at Berkeley, her Masters in Social Work from the University of Southern California, and her Doctorrate in Social Welfare from UCLA. Her publications and research interest include: the psychological effects of the World War II internment camps on Japanese Americans, "amae" in Japanese American families, interracial marriages and mixed-race people, and the experience of minority faculty in higher education. She hopes to learn more about social work education and interracial children from a cross-cultual perspective during her stay in Japan until July, 1997.

角川裕次（情報教育研究センター講師）

広島大学での情報教育を目的とする，情報教育研究センターが10月１日より発足しました。10月16日付で，工学部第二類より情報教育研究センターの講師として，移ってきた角川裕次（かくがわひろつぐ）と申します。

専門は計算機工学で，主に分散アルゴリズム理論を研究しています。趣味はいろいろあります：料理，読書（特に昭和初期の日本近代文学），紅茶，写真，天体観察，魚釣り，美術館めぐり，コンピュータープログラミングなどです。友達を自宅に呼んでティーパーティーをするのが好きなのですが，最近は忙しくて時間がとれず，残念です。紅茶が好きな人はぜひ声をおかけ下さい。

教育という難しいテーマの仕事ですが，情報教育研究センターをできるだけいいものにしてゆきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

読者からの手紙

中原　ゆうこ（地域文化コース　07生）

世間一般の人は，総科のことを“サイエンスな学部”だと信じているらしく，「何故，文系が存在するのだろう？」と不思議がる人も多い様です。そこで，「総合科学部ってゆーのは，『総合科・学部』なんだよ。」と言うと，初めて納得してもらえる次第です。

総科に入学してから2年近く立ちましたが，総合科だけあって，私の知っている総科よりも知らない総科の世界の方が多いです。故に，私にとって「飛翔」は，総科のことを知ることができる貴重な情報源となっています。

「飛翔」をパラパラと捲ると，私の理解力を超えた先生方の研究報告もあれば，総科のイベント報告もあり，意味不明の写真（前号の犬猫の写真は何なんですか？）もあって，総科の活動内容の深さと広さが伝わってきます。そのような多様な活動を展開している総科も凄いですが，それを文章にして私たちに伝えてくれる「飛翔」編集委員さんたちも，凄いと思います。

「飛翔」の中で，毎回密かに楽しみにしているのが教官室紹介で，それを読むだけで先生方への親近感を感じるから不思議です。（教官室を訪れてみようかなと思ったりしてます。）ちなみにリクエストは可能なんですか？

最後に，「飛翔」編集委員の皆さん，人材不足にもめげず，総合科という“大所帯”・“ごった煮”学部の情報のパイプ役として，これからもいい記事を書き続けていって下さい。

P．S　本当に人材不足らしいので，興味のある人，ヒマな人は手伝ってあげて下さい。

小池　聖一（社会科学コース）

広島大学のシンボル・フェニックスにひっかけたであろう「飛翔」という名称に親しみをもっています。ただし，「ダサイ」表紙に広大総科の存在をひきつけてみるのは私だけでないでしょう。

前置きはこの程度にして，51号の記事では「まちづくりという生き方」が目を引きました。東広島の住民である私にとってここがまず「社会」として成熟しておらず，繁華街のキャパもそれに対応できないことを指摘しておきたい。その意味で，MUSEの活動には好感がもてたものの（草の根と「文化」との相違点を明確化も…），シニカルな分析もしてもらいたかった（なぜ地元青年会議所と酒をのむことが町づくりになるのかな～「兄貴」？）。そして，「総科オリキャンのゆくえ」では，実際に今年参加しただけに注目して読ませてもらった。わざわざ鏡山と同じような所に行ってキャンプする理由がわからないだけでなく，そもそも集団で「感動」すること自体に懐疑的な私にとって，本記事の指摘を頷きつつ読むことができた。読後の結論を言わせてもらえば，やめて別の行事にすればよい，です。総科生の実践力は，多元的であるべきだ，と思うのですが……。最後にゼミ員でもある渡邉前学生編集委員長に一言，「これからは単位もとれよ」。

前田　理絵（元ＬＬ準備室）

いつも何気なくパラパラとめくって見ている飛翔に自分の書いた物がのるなんて，戸惑いの気持ちと申し訳ないような気持ちとが入り交じって複雑な心境です。

さて気を取り直してもう一度飛翔をよく読んでみると，あらためてその内容の豊富さに驚かされます。広島大学総合科学部のことだけではなく周辺地域，一番大きな所では東広島市についてのことまで幅広いテーマを取り上げていて，地域と共に発展して行こうとしている姿勢がうかがえます。こういった姿勢は今後も続けていってもらいたいところです。

飛翔第51号で私が特に注目して読んだ記事は“総科オリキャンのゆくえ”でした。私は参加したことはありませんが以前からオリキャンについては様々な問題があるというふうに聞いていました。それは参加した学生が一番肌で感じていたことだと思いますが，今回の特集はオリキャンの在り方・意義をみんなに定義してもう一度オリキャンを考え直すいいきっかけになったのではないかと思います。しかしこれといった解決策がみつかっていないのでもっと議論する余地はあると思います。今後も続けていってほしい特集です。

これからも様々な問題を取り上げてよりよい学生生活を送るための議論の場となるような飛翔であり続けてほしいです。

中　洋一郎（１期生／広島経済大学勤務）

いつも“飛翔”の人事移動の欄に目を引きつけられる。自分が十分おじさんといわれる齢になったことは忘れ，「えっ，○○先生はもう定年！」などと驚きながら見入っている。先日も，かつて教えていただいた先生のお名前を目にし，ひどく懐かしい気持ちになった。学生時代この先生から「君たち最近の学生は本を読んでいない」とたびたび言われ，その都度，一応発憤して紹介された本を買い込むのだが…。はたして4年間で，卒論，レポート，授業に必要な本以外，いったい何冊の本を読んだだろうか。図書館で一生懸命資料を探した記憶も卒論のときだけだ。しかし，そんな私が，今図書館員をしている。

3年生のとき本屋のアルバイトをした。洋書専門のＮ書店が本の売り込みのため，既に図書館に所蔵しているかどうかの調査をする学生アルバイトを探していた。たまたま，コースの連絡室に顔を出した私と友人に声がかかった。しばらく出版リストを片手に数学図書室の図書カードを繰る日が続いた。世の中にこんな商売（洋書販売専門書店）があることをはじめて知った。卒業と同時にこの本屋ではないがM書店に就職した。成り行きであった。そこで営業を10年した後，縁あって，今の職場（大学図書館）に移った。（N→M→L。次はKか？）特に読書好きというわけでもなかった私が20年も本というものに人より少し近い関わり方をしてきたことになる。はじまりはやはりあのときなのだろうか。── などと，飛翔が送られてくる度に，記事に学生時代の記憶を重ね合わせながら楽しませてもらってる。

『飛翔』の誌面に対する意見・希望・苦情・または卒業生から学生への一言など，何でもお寄せ下さい。字数は400～600字程度でお願いします。（宛先および編集室の場所は最後のページ）